

『一人の笑顔のために』

「限界は、自分が作り出している思い込みに過ぎない」

今、パラリンピックが開催されていますが、このことばはあるパラアスリートのことばです。

障がいがあるから、運動ができないと勝手に思い込んでいないか。努力次第でどんなこともできるようになる。それをみんなに伝えたいという思いで多くのパラアスリートがパラリンピックに臨まれています。



皆さんは無限の可能性を持っています。

しかし、人は過去の経験や体験によって、「自分にはできない」「自分のレベルはこれくらいだ」「これ以上は無理だ」と思い込んで、限界を勝手につくってしまうのだそうです。人間だけでなく、動物もまた思い込みで可能性にフタをします。



サーカスの像の話です。サーカスの像は子どものころ、脚に鎖をつけて逃げないように動けなくされます。子どもの像は何度も鎖を引っ張って逃げ出そうとしますが、動けません。そのうち、子どもの像は「鎖＝動けない」と思い込み、鎖をつけられると引っ張ることをやめてしまうのだそうです。こうやって育てられた像は、大きくなっても鎖をつけられると動けないと思い込んでいるので、おとなしくなるのです。鎖は土に軽く打ち込んでいただけなので、大人の像であれば簡単に外すことができるのに、動こうとしなくなるのです。

本当はできる力があるのに、できないと思い込んでしまう。人間も同じです。本当はできる力があるのに、過去の経験や体験によって、できないと思い込んでしまうのです。

このように、人間は、良くも悪くも、思い込みを実現する力を持っています。だからこそ、運動でも勉強でも、すべてにおいて「絶対できる」と自分を信じるのが大切なのです。

パラリンピックのアスリートのみなさんの素晴らしいプレーを見て、自分を信じて努力を続けることの大切さを感じずにはられません。

「障がい」って何だろう？

熊本市にホープ印刷という会社があります。この会社は「障がい者」と「健常者」の共同作業所としてスタートした会社です。もう20年以上も前になりますが、この会社の当時の社長をゲストティーチャーとしてお招きし、人権学習をしたことがあります。その時の岡崎社長の話が忘れられません。

「障がい」に対する「思い込み」の間違いに気付かされました。



『手が不自由だとか、足が不自由だとかいうのは「障がい」ではありません。本人の努力次第で色々なことができるようになります。足が不自由でも、車椅子を利用することで、移動することも可能です。しかし、本人の努力ではどうしてもないことがあります。それは、「段差」です。ちょっとした段差があるだけで、車椅子で移動することができなくなるのです。それが「障がい」なのです。しかし、その「障がい」（段差）はまわりの人の努力で取り除くことができます。』

「障がい」をつくっているのは、周りにいる私たちなのですね。